

令和 6 年 5 月 1 0 日

教 職 員

各位

大学院生

医学系研究科長

医学獣医学総合研究科長

大学院特別セミナーの開催について（通知）

標記のことにつきまして、下記のとおり開催いたしますのでご出席ください。
なお、大学院生については、当日出欠の確認をしますのでご承知おきください。

記

日 時 : 令和 6 年 7 月 5 日（金） 1 7 時 0 0 分～

場 所 : 宮崎大学医学部講義実習棟 3 階 3 0 3 教室

講 師 : 今川 和彦
(東海大学総合農学研究所 所長)

演 題 : 「大動物の妊娠認識から着床（初期胎盤の形成）まで」

講演内容 : 有袋類以上の哺乳動物種の雌では、季節限定のことが多いが発情周期が維持される。この間、卵巣は視床下部・下垂体前葉の制御を受けながら、排卵、黄体形成・維持、黄体退行、そして次の排卵を繰り返す。1970 年代後半より、黄体の維持と黄体退行は何によって決まるかの研究が重ねられてきた。反芻動物（ウシやヒツジ）では初期胚がタンパク性因子を分泌することで黄体退行が抑制され、結果として黄体の維持が決定することが分かった。1980 年代の中盤に入り分子生物学的手法が繁殖分野でも取り入れられるようになると、黄体抑制因子（母親の妊娠認識物質ともいわれる）の mRNA (cDNA) 配列の決定のための競争が始まった。紆余曲折はあったものの最初の cDNA の同定及びアミノ酸配列の決定をしたところ、その配列がウイルス感染を防ぐ I 型インターフェロン（インターフェロン・タウ, IFNT, と命名された）に近いことが分かった。初期胚が母親の黄体退行抑制のためにインターフェロンを放出することは、驚きをもって迎えられた。今般の講義では、IFNT cDNA の発見秘話、IFNT 遺伝子発現制御機構、IFNT の効果とその後の研究の発展をベースに胚の子宮内膜への着床から初期胎盤の形成（妊娠成立）までを考え、ウシ受胎率の向上を考えていく。